

り屢々後れて食事をなし下婢を煩はし臺所の整理を妨ぐるもの甚だ少なからず、大に省る所なかるべからず

食事に對し守るべき教規儒教之を論ずること甚だ深切なり、然りと雖ども具さに之を陳ぶること能はず之を要するに徒らに消極的粗食糲飯をこれとすに非ずして、衛生の理に適ひ滋養に注意して健全の體力を得んとするに在り。

自己の食事に對して注意を要すると同じく、他人の食事に對しても亦大に考慮する所なかるべからずたとへば人を訪問する如き務めて食事時間を避け他人の食事を妨げざる等其他條項甚だ少なからず。

●肺病の傳染につきて
柴山傳染病研究所技師の所説に曰く

肺病の傳染には二種あり、一は乾燥したる痰中に包蓄せるパチルスが大氣中に飛散し、呼吸に依て吸入すること、一は肺病者が咳したる際細唾に混入し大氣に散するを吸入する之れなり、第一の傳染は大に恐るべきものにて十中八九は之に起因す、第二は尤も重病なるもの、又は三尺以内の距離に對顔したる場合にあらざれば容易に傳染せず、旅館の寢具口洗コップ食器等は大に第二の傳染を助長する機會なることあり

パチルスは乾燥したる空氣中にあるときは幾年經過するも死亡することなし、濕温は攝氏八十度に至れば死亡す、又寒に耐えるの特性あり、人工を以て與ふる冷寒にては決して死することなし、肺病は療治に易き病症なるは現今獨逸醫學界の均しく唱道する處なるか實際然るが如し、獨逸政府が六年前に各病院に命じて肺病以外にて死亡したる者の解剖統計を徴したる百人中六十人は皆肺病に罹り全治したる痕跡を肺に残しありたり、更に病人に向て一々肺に罹りしことの有無を糺し、其無しと答ふるもの、死體を解剖するも同一の結果を得たり、故に人は知らざる間に肺に罹り只軟弱性のもの、み不治の症となるものにして、他の強壯なるものは其治すこと容易なり、一旦肺病に罹りたる者は當人の知ること否に關せず全治したる者は肺に斑痕を存する故、解剖するときは直ちに種別し得るなり、之等は實例に依る時は尤も恐るべき病氣にして、人間の多數は知らざる間に當に罹り居る病氣なり、如此ならば畢竟各自の身體の營養如何により強者には治し易く、弱者には不治の症となる結果となるなり云々（大日本婦人衛生新誌）